

## 『資本論』 第1部 資本の生産過程

<要約:紅林進>

### 第4篇 相対的剰余価値の生産

#### 第13章 機械装置と大工業

##### 第1節 機械の発達

ジョン・ステュアート・ミルは、その著書『経済学原理』の中で次のように言っている。「すべてのこれまでになされた機械の発明はが、どの人間化の毎日の労苦を軽くしたかどうかは疑問である。」

このようなことは決して資本主義的に使用される機械の目的ではないのである。

そのほかの労働の生産力の発展がどれでもそうであるように、機械は、商品を安くするべきもの、労働日のうち労働者が自分自身のために必要とする部分を短縮して、彼が資本家に無償で与える別の部分を延長するなのである。それは、剰余価値を生産するための手段なのである。

生産様式の変革は、マニュファクチュアでは労働力を出発点とし、大工業では労働手段を出発点とする。だから、まず第一に究明しなければならないのは、何によって労働手段は道具から機械に転化したのか、または何によって機械は手工業用具と区別されるのか、である。

すべて発達した機械は、三つの本質的に違う部分からなっている。**原動機、伝導機構、道具機**または**作業機**がそれである。

**原動機**:全機構の原動力として働く。蒸気機関や熱機関や電磁危機感などのように、それ自身の動力を生み出すこともあれば、水車が落水から、風車が風からというように、外部の規制の自然力から原動力を得ることもある。

**伝動構**:非常の多くの種類の伝動装置から構成されていて、運動を調節し、必要があれば運動の形態を、たとえば垂直から円形にというように、変化させ、それを道具機に分配し伝達する。

**道具機**または**作業機**:労働対象をつかまえて目的に応じてそれを変化させる。

道具機こそは、産業革命が18世紀にそこから出発するものである。

##### 第2節 機械から生産物への価値移転

機械は価値を創造しはしないが、機械を用いて生産される生産物に機械自身の価値を引き渡す。機械は生産物を安くするのではなく、自分自身の価値に比例して生産物を高くするのである。

機械は労働過程にはいつでも全体としてはいつまでもゆくが、価値増殖過程にはつねに一部分しか入ってはゆかない。機械は、自分が損耗によって平均的に失ってゆく価値よりも多くの価値は決して付け加えない。価値形成要素としての機械と、生産物形成要素としての機械との間には、大きな差が生ずる。

ただ生産物を安くするための手段だけとしてみれば、機械の使用の限界は、機械自身の生産に必要な労働が、機械の充用によって代わられる労働よりも少ないということの内に、与えられている。

だが、資本にとってはこの限界はもっと狭くあらわされる。資本は、充用される労働を支払うのではなく、充用される労働力の価値を支払うのだから、資本にとっては、機械の使用は、機械の価値と機械によって代わられる労働力の価値との差によって限界が与えられるのである。

古くから発達した諸国では、機械そのものが、いくつかの事業部門へのその応用によって、ほかの諸部門で労働過剰を生み出し、そのために、これらの部門では労働力の価値よりも下への労賃お低落が機械の使用を妨げ、また、もともと自分の利得を充用労働の減少からではなく支払い労働の減少からあげている資本の立場からは、機械の使用を不必要にし、しばしば不可能にさえするのである。

### 第3節 機械経営が労働者に及ぼす直接的影響

#### a 資本による補助労働力の取得 婦人・児童労働

機械が筋力をなくしてもよいものにする限りでは、機械は、筋力のない労働者、または身体の発達は未熟だが手足の柔軟性が比較的大きい労働者を充用するための手段になる。それだからこそ、婦人・児童労働は機会の資本主義的充用の最初の言葉だったのだ！こうして、労働と労働者との代用物は、たちまち、性の差別も年齢の差別もなしに労働者家族の全員を資本の直接的支配のもとに編入することによって賃金労働者の数を増やすための手段になったのである。

機械は、労働者家族全員を労働市場に投ずることによって、青年男子の労働力の価値を彼の全家族の間に分割する。それだから、**機械は彼の労働力を減価させるのである。**

機械はまた資本関係の形式的な媒介すなわち労働者と資本家との間の契約をも根底から変革する。商品交換の基礎の上では、資本家と労働者とが、自由人として、独立な商品所持者として、一方は貨幣と生産手段の所持者、他方は労働力の所持者として、相対するということが、第一の前提だった。ところが、いまでは資本は未成年者または半成年者を買う。以前は、労働者は彼自身の労働力を売ったのであり、これを彼は形式的には自由な人として処分することができた。彼は今では妻子を売る。彼は奴隷商人になる。

#### b 労働日の延長

機械は、労働の生産性を高くするための、すなわち商品の生産に必要な労働時間を短縮するための、もっとも強力な手段だとすれば、機械は、資のお担い手としては、最初はず機械が直接にとらえた産業で**労働日をどんな自然的限界をも超えて延長するための最も強力な手段になる。**

#### c 労働の強化

機械の進歩と、機械労働者というひとつの独特な階級の堆積とにつれて、労働の速度が、従ってまたその強度が自然発生的に増大するということは、自明である。

機械による労働の強化は、**機械の速度を高くすること**と、同じ労働者の見張る機械の範囲、すなわち彼の**作業場面の範囲を広げること**によってもたらされる。機械の構造の改良は、労働の強化におのずから伴うものである。

### 第4節 工場

ユア博士の自動化工場に対する2つの描写

第一の描写では

「1つの中心的(原動力)によって間段なく作動させられる1つの生産的機械体系を熟練と勤勉をもって担当する、青年、未成年のさまざまな等級の労働者の協業」というように、そこでは労働者が主体的に描かれ、大規模な機械の使用に当てはまることを描く一方、

第二の描写では

「1つの同じ対象を生産するために絶えず強調して働く無数の機械的器官—その結果、これらすべての器官に事故制御的な1つの動力に従属する—から構成されている1つの巨大な自動装置」というように、そこでは自動装置の主体性が強調され、大規模な機会の資本主義的使用を表している。

人間の労働過程では機械は労働手段の一つだが、資本主義社会では立場が逆転し、資本家が所有する機械を動かすために、労働者が雇用されるのである。

マニファクチュア的分業と違って、機械化工場では、機械が配置され、労働者は機械が行う作業の助手として配分される。

機械化工場では、道具機について働いている主要労働者とその少数の助手、さらのその機械労働者の下働き(ほとんどの場合、児童)というように区分され、また技師、機械専門工、指物職のような機械設備全体の管理とその修理に従事している少数の労働者に分けられる。

## 第5節 労働者と機械との闘争

資本とともに労働者の闘争も起こり、マニファクチュア時代にも、多くの動きは出たが、機械の導入以後は、大きな変化が起こった。

機械の導入により、労働者が職を失うという大変重大な事態が起こった。機械経営では、少ない労働力で多量な製品を作ることが可能となり、その結果、労働市場には、失業者があくられることになった。特に、高い賃金をもらっていた熟練工は、その労働力の価値を失い、生産から追い出された。労働者の間には「慢性的窮乏」がはびこることになった。

また大工業での機械の改良などが、労働者の一部を工場から追い出すことにもなった。

この異様な機械と労働者の「完全な対立」は、「機械破壊運動」を引き起こし、初めて、労働手段に対する労働者の粗暴な反逆がなされた。

しかし機械を破壊しても元の手工業に戻れるはずもなく、やがて労働者たちは、問題は機械という存在ではなく、機械の所有者である搾取形態＝社会的利用形態であることに気づく様になった。

## 第6節 機械によって駆逐される労働者に関する補償説

機械の出現で職を失った労働者は他の分野で職を見つけられるのかという問題を取り上げ、それが可能だとするブルジョワ経済学者の主張を一つ一つ論破し批判。

- ・機械が労働者を駆逐したとき、労働者の減少に伴って可変資本が遊離する。この遊離した資本で同数の労働者を雇用できる。
- ・ある産業に機械を導入した場合、その産業の労働者は減っても、機械を作る産業での出の雇用が増える。
- ・労働者の雇用が減ると、その分の生活手段が遊離するから、その遊離した分が資本移転貸して雇用が拡大する、など。

雇用の拡大が起こるケースもある。

- ・機械経営が拡大することに伴って、原料などの生活手段を供給する部門が生産を拡大することとなり、その部門の雇用が拡大。
- ・中間製品を生産する部門意機械が導入されると、その製品の加工部門での雇用が拡大。
- ・機械化によって資本化が裕福になるとぜいたく品を求めるようになり、そのぜいたく品を生産する部門の雇用が拡大する。・運河やドック、トンネル、端などといった長期的な投資を必要とする産業や、ガス製造、電信、写真、海運、鉄道などの新しい部門が発展することによ

て雇用が拡大する。

### マルクスの批判

- ・機械によって駆逐された労働者達は、作業場から労働市場に投げ出され、そこですでに資本主義的搾取のために利用され売る状態にある労働力の数を増加させる。ここでは労働者階級の野ための保障だといわれる機会の作用が、労働者にとってうあもつとも恐ろしい鞭として働くようになる。
- ・この労働者がほかの何らかの産業部門で職を求めることはできるが、投資口を求める新しい追加的資本を媒介として行われるのであって、機械の導入で駆逐したことの保障ではない。
- ・彼らの持っていた技能は分業によって価値を失い、低級な賃金の低い労働部門でしか働き口を見出せない。
- ・各産業部門の間では人の流れがあるが、機械によって駆逐された労働者は、その人の流れの中で大部分が零落して滅びてしまう。

### 雇用の実態(1861年尾イギリスの人口調査から)

イングランドとウェールズの総人口約2006万人中、就業可能な男女約800万人の職業と就業人口。

農業労働者	109万8261人
すべての繊維工場の労働者	64万2607人
炭鉱、金属高山の労働者	56万5835人
全金属工場・金属化工業の労働者	39万6998人
召使い階級	120万8648人

※資本家の富の増大によって、非生産的な仕事に従事する「召使い階級」が増えた。

## 第7節 機械経営の発展に伴う労働者の排出と吸引 綿業恐慌

この説では、産業循環から、資本主義における雇用問題を長期的に検討している。

資本主義において「産業は、中位の活気、繁栄、過剰生産、恐慌、停滞という一連の系列に転化する」という産業循環をなし、それに伴い労働者の輩出と吸引を行い、それは労働者の就業や生活に「不確実性と不安定性」を与える。

## 第8節 大工業によるマニュファクチュア、手工業、家内労働の変革

### a 手工業と分業とにもとづく協業の廃棄

機械は手工業に基づく協業を廃棄し、また手工業的労働の分業に基づくマニュファクチュアを廃棄する。

### b マニュファクチュアと家内労働とへの工場制度の反作用

工場制度の発展につれて、機会は、マニュファクチュアに侵入してくる。それとともに、旧来の分業から生じたマニュファクチュア編成は変転し、婦人やあらゆる年齢層の子どもの労働や不熟練工の労働、要するに安い労働力の重要を木曾とするようになる。このことは、機会を使用するかしないかを問わずすべての大規模に結合された生産意当てはまるだけでなく、いわゆる家内工業にも、それが労働者の自宅で営まれる小さな作業場で意図何マレルカを問わず、当てはまる。家内工業は今では工場やマニュファクチュアや問屋の外業部に変わっている。資本によって場所的に大量に集中され直接に指揮される工場労働者やマニュファクチュア労働者や手工業者のほか、資本は、大都市の中や公害に散在する家内労働者の別軍をも、目に見えない糸で動かすのである。

安価で未熟な労働力の搾取は、近代的マニュファクチュアでは、本来の工場で行われるよりももっと露骨になる。この搾取はまた、いわゆる家内労働では、マニュファクチュアで行われるよりもっと露骨になる。

#### c 近代的マニュファクチュア

そこにおける労働者の劣悪な状態の具体例を示す。

#### d 近代的家内労働

そこにおける労働者の劣悪な状態の具体例を示す。

#### e 近代的マニュファクチュアと近代的家内労働との大工業への移行 これらの経営様式への工場法の適用によるこの革命の推進

女性や未成年者の労働力の単なる乱用、一切の正常な労働条件と生活条件との単なる強奪、過度労働と夜間労働との単なる残虐、このようなことによつて労働力を安くすることは、結局は、もはや越えられない一定の自然的限界にぶつかり、またそれとともに、このような基礎の上に立つ商品の低廉化も資本主義的搾取一般も同じ限界にぶつかる。ついにこの点にきてしまえば、機械の採用の時が告げられ、また、分散していた家内労働(あるいはまたマニュファクチュア)の工場経営への急速な転化の時が告げられる。

決定的に革命的な機械、すなわち婦人服製造、裁縫、靴製造、縫い物、防止製造、等々のようなこの生産部面の無数の部門をすべて一様にとらえる機械、それはミシンである。

工場法の適用の拡大は、一方では、機械設備を増やすことや筋肉の代わりに蒸気を動力として用いることを共用する。他方では、時間で失われたものを空間で取り返すために、炉や建物などのような共同的に利用される生産手段の拡張が行われる。つまり、生産手段おいつその集積と、それに対応する労働者のいっそうの密集とが現れるのである。

工場法がマニュファクチュア経営から工場経営への転化に必温室手必要な諸要素を温室的に成熟させるとすれば、それはまた同時に、資本投下の増大の必要によつて、小親方の没落と資本の集積とを促進するのである。

### 第9節 工場立法(保健・教育条項) イギリスにおけるその一般化

イギリスの工場の中の労働日の時間数には関係のないいくつかの条項にも簡単に触れておかなければならない。

**保健条項**は、その用語法が資本家のためにその回避を容易にしていることは別としても、まったく貧弱なものである。

工場法のこの部分は、**資本主義的生産様式はその本質上ある一定の点を越えてはどんな合理的改良をも許さないものだ**ということを、的確に示している。

**教育条項**は、全体として貧弱に見えるとはいへ、それは初等教育を労働の強制条件として宣言した。その成果は、教育および体育を筋肉労働と結びつけることの、従つてまた筋肉労働を教育および体育と結びつけることの、可能性をはじめて実証した。工場監督官たちはやがて学校教師の証人尋問から、工場児童は、世紀の昼間生徒の半分しか授業を受けていないのに、それと同じかまたはしばしばそれよりも多くを学んでいるということを発見した。

工場制度からは、われわれがロバート・オーエンにおいて詳細にその後を追うことができるように、未来の教育の萌芽が出てきたのである。この教育は、一定の年齢から上のすべての子どものために**生産的労働を学業および体育と結び付けようとする**もので、それは単に社会的

生産を増大するための一方法であるだけでなく、**全面的に発達した人間を生み出すための唯一の方法**でもある。

大工業は、いろいろの労働の転換、従ってまた労働者のできるだけ多面性を一般的な社会的生産法則として承認し、この法則の正常な実現に諸関係を適合させることを、大工業の破局そのものを通じて、生死の問題にする。ひとつの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに、いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行うような**全体的に発達した個人**を持ってくることを、ひとつの生死の問題にする。大工業を基礎として自然発生的に発達してこの変革過程の一つの要因となるものは、**工学および農学の学校**であり、もう一つの要因は「**職業学校**」であって、この学校では労働者の子どもが技術学やいろいろな生産用具の実際の取り扱いについてある程度の教育を受ける。工場立法は、資本からやっともぎ取った最初の譲歩として、ただ初等教育を工場労働と結びつけるだけだとしても、少しも疑う余地のないことは、労働者階級による不可避的な政権獲得は理論的および実際の技術教育のためにも労働者学校のなかにその席を取ってやるであろうということである。また同様に疑う余地のないことは、資本主義的生産形態とそれに対応する労働者の経済的諸関係はこのような変革の酵素と古い分業の廃棄というその目的とに真正面から矛盾することである。とはいえ、一つの歴史的な生産形態の諸矛盾の発展は、その解体と新形成とへの唯一の歴史的な道である。

工場立法が工場やマニュファクチュアなどの労働を規制する限りでは、このことは当初はただ資本の策主権への干渉として現れるだけである。ところが、いわゆる家内労働の規制は、いずれも、直ちに父権の、すなわち近代的に解釈すれば親権の、直接的侵害として現れる。事実の力は、ついに、大工業は古い家族制度とそれに対応する家族労働との経済的基礎とともに古い家族関係そのものをも崩壊させるということをし、いやおうなしに認めさせた。子どもの権利が宣言されざるを得なくなった。

労働者階級の肉体的精神的保護手段として工場立法の一般化が不可避になってきたとすれば、それはまた他方では、矮小規模の分散的な労働過程から大きな社会的規模の結合された労働過程への転化を、従って資本の集積と工場制度の単独支配とを、一般化し促進する。工場立法の一般化は、資本の支配をなお部分的に覆い隠している古風な形態や過渡形態をことごとく破壊して、その代わりに資本の直接のむき出しの支配を持ってくる。従ってまた、それはこの支配に対する直接の闘争をも一般化する。それは、小経営や家内労働の諸部面を破壊するとともに、「過剰人口」の最後の逃げ場を、従ってまた社会機構全体の従来の安全弁をも破壊する。それは、生産過程の物質的諸条件および社会的結合を成熟させるとともに、生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係を、従ってまた同時に新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる。

## 第10節 大工業と農業

農業での機械の使用は、それが工場労働者に与えるような肉体的損害をもたらす恐れはほとんどないが、それは**農業では労働者の「過剰化」**に**いっそう強く作用し、また反撃を受ける**ことなく作用する。

農業の部面では、大工業は、古い社会の保塁である「**農民**」を**減ぼして賃金労働者をそれに替える**限りで、もっとも革命的に作用する。こうして、農村の社会的変革要求と社会的対立は都市のそれと同等にされる。

資本主義的生産様式は、一つの新しい、より高い総合のための、すなわち農業と工業との対立的に作り上げられた姿を基礎として両者を結合するための、物質的諸前提をも作り出す。

資本主義的生産は、それによって大中心地に集積される都市人口がますます優勢になるにつれて、一方では社会の動力を集積するが、他方では**人間と土地との間の物質代謝を攪乱**する。すなわち、人間が食料や衣料の形で消費する土壌成分が土地に帰ることを、つまり土

地の豊饒性の持続の永久的自然条件を、攪乱する。従ってまた同時に、それは都市労働者の肉体的健康をも農村労働者の精神生活をも破壊する。しかし、同時にそれは、かの物質代謝の単に自然発生的に生じた状態を破壊することによって、再びそれを、社会的生産の規制的法則として、また人間の十分な発展に適合する形態で、体系的に確立することを強制する。

資本主義的農業のどんな進歩も、ただ労働者から略奪するための技術の進歩であるだけでなく、同時に**土地から略奪するための技術の進歩**でもあり、一定期間の土地の豊度を高めるためのどんな進歩も、同時にこの豊度の不断の源泉を破壊することの進歩である。ある国が、たとえば北アメリカ合衆国のように、その発展の背景としての大工業から出発するならば、その度合いに応じてそれだけこの破壊過程も急速になる。それゆえ、**資本主義的生産は、ただ、同時に一切の富の源泉を、土地をも労働者をも破壊することによってのみ、社会的生産過程の技術と結合とを発展させるのである。**